

最上先生『国際法以後』との出会い

一 国際政治学との交差点

葛谷彩 (明治学院大学)

去る6月22日駒澤大学にて開催された最上敏樹先生『国際法以後』出版記念講演会にパネリストとして登壇する機会に恵まれた。ここに至るまでには様々な出会いがあり、いわば筆者のコメントはそうした出会いに対する自分なりの回答であった。

2月下旬に自著のランチョンセミナーでチューリヒに来ていた講演会の主催者である芝崎厚士先生に誘われて、当時サバティカルでワルシャワに滞在中であった筆者はチューリヒに赴き、そこで研究滞在中であった最上先生に引き合わされたのが始まりであった。美味しそうなトルコ料理を前にして、「あなたのご研究の社会的意義は何だと思われますか」という、院生時代に医者である父親に何度も訊かれて以来の問いを最上先生からぶつけられ、「研究自体が社会の多様性への貢献」などあれこれ答えるも、その具体的な内容はアルコールのせい記憶にない。その後芝崎先生より最上先生の名著『国際法以後』の書評コメントを依頼された。なぜ自分なのかとは思ったが、先生からぶつけられた問いにきちんと答えられなかったことが自分の中で引っ掛かっていたこともあり、お引き受けした。

3月に帰国した筆者は、4月からこれも芝崎先生に誘われて、先生の大学院のスクーリングに参加。2か月半余りかけて他の参加者とともに『国際法以後』を講読した。正直に言えば、「一般読者に向けて書いた」という先生の言葉が恨めしく思えるほど内容は難しく、何度も心が折れそうになった。しかし、読み進めていくうちに、本書の面白さの虜になっていった。西欧中心主義的なりベラリズムを一刀両断する一方で、モーゲンソーやシュミットなどリアリズム国際政治学でお馴染みの学者たちに限りなく接近して切り結んでいく論述に刺激と、リアリズムに近い国際政治学者としての共感を覚えつつも、その目標はリアリズムの先にあるのではと思わせる言葉―「後退線」に不穏さを覚え、ページを繰る。他方で、その面白さを支えているのが、冒頭の先生の問いかけの真剣さであることも確かめられた。その際共に本書を講読した芝崎先生、院生や他の研究者の方々のコメントや筆者のコメントに対するフィードバックは大変有意義であった。

筆者のコメントのタイトルである「一読者に限りなく近い国際政治学研究者の立場からのコメント」は、半ば言い訳と由緒正しい国際法学者であるお二人の登壇者への甘えではあるが、半ば偽らざる本音でもある。またそうしたスタンスからコメントすることが、一般の方も多数参加している聴衆に対して、本書の面白さを伝えられるのではと考えたからでもある。どこまでその面白さを伝えられたか甚だ心許ない限りであるが、筆者の問いかけに明快に、かつ後退線の先にある展望を内容とする次回作への意欲も見せつつ答えていただいた最上先生、同じ登壇者として大いに学ばせていただいた小坂田先生と小栗先生、共に講読した院生の方々、当日率直な感想を寄せていただいた方々、最後にこのような素晴らしい出会いを与えていただいた芝崎先生に感謝を申し上げて結びとしたい。